



ハレムテンパスト

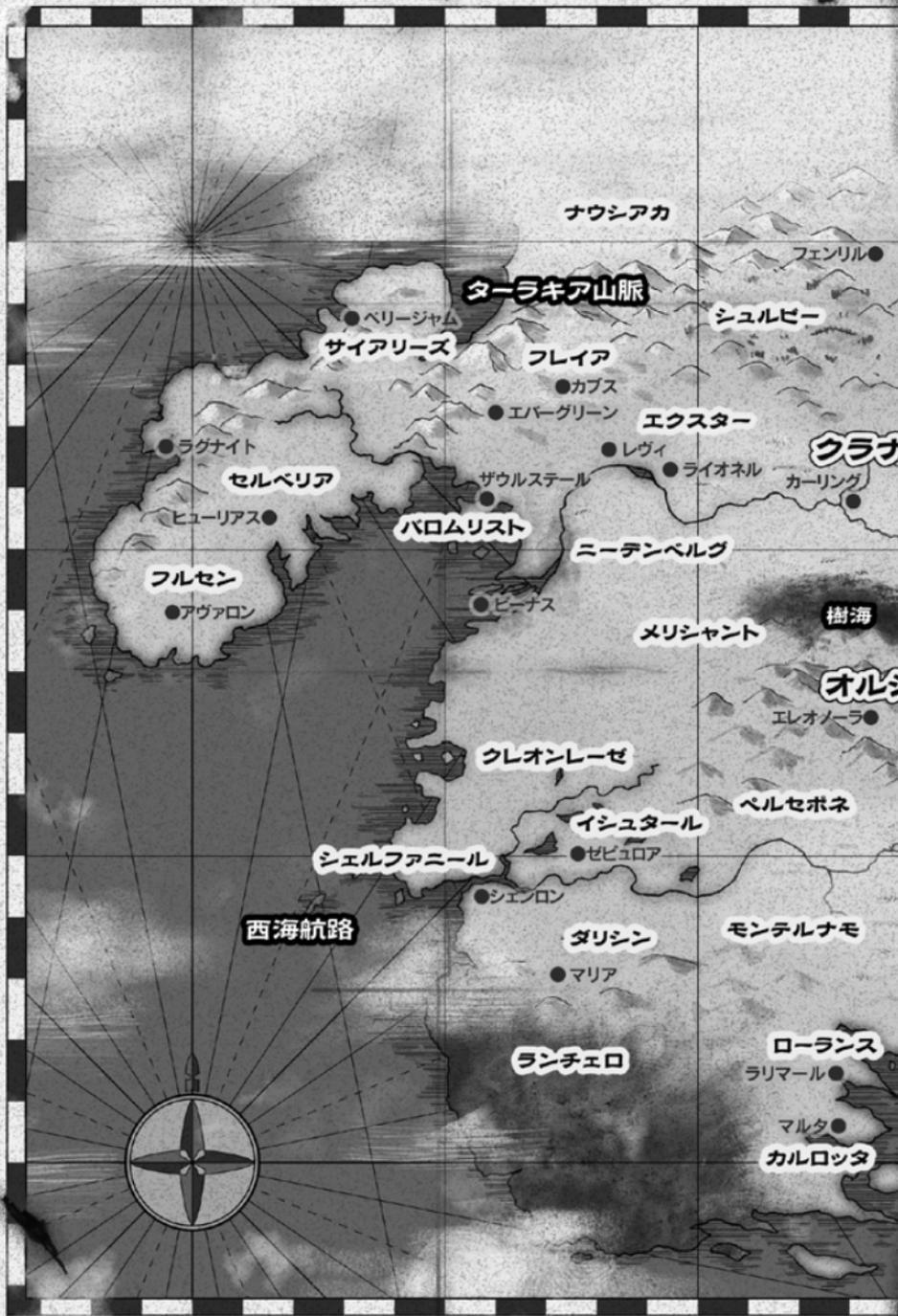
Harem Tempest

小説 竹内けん 挿絵 浅沼克明

立ち読み版

ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル

ターラキア山脈

シュルビー

●ベリージャム
サイアリーズ

フレシア

●カブス

●エバグリーン

エクスター

●ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

●レヴィ

●ライオネル

クラナ

カーリング

ヒューリアス

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

●アヴァロン

●ビーナス

メリシャント

樹海

オル

エレオノーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

シエルファニール

イシュタール

●ゼビュロア

●シェンロン

西海航路

タリシン

モンテルナモ

●マリヤ

ランチェロ

ローランス

ラリマール

●マルタ

カルロッタ



登場人物紹介

Characters



オルフェ

オルディーンの義妹で、軍の後方支援担当。義兄のことを慕っている。



ゲリュオン

オルディーンの側近。武芸・軍略ともに優れた才女。



ツキヨミ

レナス家の娘。見た目も性格もまだまだ子供っぽさを残している。



リフィル

セクシーなビキニ鎧で戦場を駆けるスタイリッシュな女將軍。

オルディーン

ラルフィント王国先王の弟。国の南端部の守りを任されている。

第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章
動乱	決戦	死闘	決起	蟄居	火種

（うわ、この女、小便漏らしながら、いつている）

恐ろしい女として、もつとも警戒していた女の痴態っぷりに、見てはいけないものを見てもしまったような恐怖を感じて、目を逸らす。

そして、ゲリュオンはうつ伏せに倒れた。逆にオルディーンは女体の森から身を起こし、ゲリュオンの充実した褐色の尻を撫で回しながら、グエンに声をかける。

「はあ……はあ……はあ……どうだい、グエン將軍。こいつはいい女だろ？」

「その……大変結構なものを見せていただきました」

生粋の武人であるグエンとしては、そうとしか答えようがない。

「ゲリュオンが淫乱だ、というのは軍事機密だぞ。こいつの本性が知れたら兵士たちの士気に関わる」

「さ、左様ですな」

オルディーンの冗談に、グエンは喘ぎながら頷く。

すっかり気を飲まれているグエンに向かって、オルディーンはニヤリと笑った。

「実は今日来てもらったのは、他でもない。こいつをグエン將軍にもらってもらいたいと思っただけからだ」

「なんとっ!？」

思いもかけない提案に、グエンは目を剥いた。

「最前線の無聊を慰めるためにも、女は必要だろう」

「しかし、ゲリュオン殿は、閣下の腹心と心得ていましたが……」

喘ぎながら応じるグエンに、オルディーンは両手を伸ばし、ゲリュオンの大きな乳房を揉みしだきながら、肩を疎める。

「ああ、でも、もう俺が彼女の軍略を必要とすることはないだろうし、第一、少し女を増やしすぎてしまったからね。少し整理しなくてはならないと感じたんだ。俺とグエン將軍の間には、不幸な行き違いがあったと思う。俺のことを王宮にとりなしてもらうためにも、彼女を譲渡しようと思うんだ」

オルディーンが王宮に目をつけられていることは自明のことだ。実際、グエンはその対策のために派遣されてきた。

いわばそのグエンを懐柔するための賄賂だろう。

愛馬を下賜するように、自分の愛妾を下賜しようというのだ。

「しかし、それでは彼女の気持ちは……」

思わず口走ったグエンの言葉に、気持ちよさそうに腰をくねらせながらゲリュオンはけだるげに応じる。

「ああ、この身をグエン將軍に預けることで、少しでも若様のお役に立てるなら、それを最後のご奉公と致します……」

「と、いうことだよ」

オルディーンはあっさりと頷く。

ゲリュオンの言動が健気すぎて哀れに思ったグエンは、思わず皮肉を言う。

「女となんとかは新しいほどいい、ということですか？」

「そうあからさまに言わないでくれよ。俺だって惜しいんだ。ゲリュオンは俺が長年かけて育てた女だよ。でも、グエン將軍のお好みのおかげだからね。特別に譲ろうと考えたんだ」

「あ、また大きく……」

四つん這いのゲリュオンは表情を輝かせた。いまだに繋がっていた逸物が再び隆起してきたのだろう。

さすがに若い。男盛りの逸物だ。

ゲリュオンは四つん這いのまま、腰をクネクネと動かし始めた。

思わずオルディーンは、気持ちよさそうに顔を歪める。

「くう……まあ、いささか年は食っているがね。まだまだいけるだろ。見た目もいいが中も凄いぞ。こいつのオマ○コはタコツボだ。逸物を咥え込んだら、もう決して離さない。ほら、こんな具合に」

四つん這いのワンワンスタイルになりながらゲリュオンの腰使いは、実にスムーズでイヤらしい。

まさに完全調教済みの女だ。

単なる美女ではない。男を楽しませる方法を骨の髄まで心得ている痴女ならではの腰使いだろう。

「こいつの楽しみ方はオマ○コだけじゃないんだよ」

そう嘯いたオルディーンは、自らの右手の人差し指と中指を口に含み、唾液を乗せてから、ゲリュオンの肛門に添えた。

そして、押し込む。

「ひい、そ、そこは……!?!」

ゲリュオンは慌てるが、オルディーンの方は委細構わず二本の指をズッポリと押し込んだ。

「ひい、ひいひい……」

口元をだらしなく開いたゲリュオンは、涎を噴き、涙を垂らして悶絶する。

オルディーンは二本の指を閉じたり開いたりして、肛門を弄ぶ。

「キミはちんぽをぶち込まれた状態で、アナルを穿られるのが好きだね。締まる力が一気に倍増する」

「だ、だって、若様が、あたしの身体を、そういう風に調教したから♪」

三十代も半ばに達した女。ただ若いだけで何も持っていない、恥知らずな女ではない。

地位も名声もある軍略家の女が、見せ物にされているのだ。屈辱と恥辱で顔を真っ赤にしているが、同時に陶酔の色が色濃く浮かんでいる。

「くっ、もう我慢できない。最後はこちらの穴で楽しませてもらおう」

そう叫んだオルディーンは、膣穴からいきり立つ逸物を取り出すと、そのまま肛門にぶち込んだ。

「あ、そんな最後がアナルだなんて……ああ」

過去に何度もアナルセックスをされているのだろう。

逸物は難なく、充実した女性の肛門に入ってしまった。

しかし、肛門は肛門だ。逸物を入れるための器官ではない。

女の身からすると、羞恥こそ凄まじいが、それほど気持ちよくなるはずだ。

ゲリュオンは顔を真っ赤にして、必死に耐える。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

オルディーンの方は、ゲリュオンの背中に覆いかぶさり、両手を腋の下から入れて、うつ伏せになり、さらに存在感を増した乳房を揉みしだく。

そうしながら、オルディーンはゲリュオンの耳元でなにやら囁く。

「ああ、恥ずかしい。あたし、アナルでも感じてしまう。アナルでもイける変態女なんです。こんな変態女でもよろしかったら、もらってくださいさ〜いいいいいい!!!」



間違ひなくオルディーンに、そう叫ぶように命じられたのだろう。

美貌と才能を兼ね備えた気高い女の正体が、完全な牝犬であるということを、いやがおうにも見せつけられる。

「それじゃ、お尻の穴にくれてやるぞ」

「はい、ください。お尻の穴にくださいいいい」

「くっ」

充実した牝の尻の穴に向かって、オルディーンは思う存分に射精する。

ドビュ！ ドビュ！ どぶぶぶぶ!!!

「ああ、ああ、あああああ!!!」

自己申告通り肛門でも絶頂できるように調教されてしまった女は、口腔から舌を突き出し、涎を噴き、眼帯のない左目は上を向け白目を晒すという、およそ女軍師とは思えぬ締まりのない忘我の表情になってしまった。

「ふう」

心行くまで己が側近を辱めたオルディーンは、満足の溜息とともに小さくなった逸物を引き抜く。

「ああ、ああ……」

充実した女体がだらしなくベッドに潰れて、ピクピクピクと痙攣を繰り返している。

そのさまを愛しげに見下ろしてオルディーンは笑う。

「まったく、最後に二回も気をやってしまった。ほんと手放すのが惜しいな」

「……」

「どうか、グエン將軍。この城に滞在している間の遊び相手としてだけでも、手元に置かないか？」

言葉もないグエンをちらりと見た後、オルディーンは脱力しているゲリュオンの尻を叩く。

「さあ、キミからもアピールしなさい」

ご主人様に命じられた性奴隷は、けだるげに身を起こすと、四つん這いのままベッドの端まで来た。

そして、グエンに見られていることを意識した婀娜あだっぽい動作で、腰をかけるとM字開脚になった。

当然、陰唇と肛門が丸晒しになり、どちらの穴からも白い液体が溢れ返っている。

「殿下にやり尽くされて、飽きられてしまったお古ですけど、サービスしますわよ。よろしかったら、ご使用になりませんか？」

大柄な女だ。

肩幅があつて、前後の厚みもある。乳房は大きく、腹部は引き締まり、尻は張っている。

五十代のグエンにとつて、三十四歳のグリュオンは十分に若い娘だ。

男と思いつきり楽しんで直後の女だけが見せる退廃的な雰囲気のまま、女の恥部を晒した熟女は、右手の人差し指と中指と薬指を膣穴に突っ込んだ。

「ああ……」

官能的な牝声を漏らしたグリュオンは、自らの膣穴を存分にかき混ぜて、白いドロドロとした液体を掬い出し、同じく官能的な唇でペロリと舐めた。

「ゴクリ」

そのあまりの卑猥さに、思わずグエンは生唾を飲んだ。

「殿下を精通に導いたのはこの身体。殿下の筆下ろしをしたのもこの身体。殿下に処女を捧げ、アナルも掘られました。口から胃に流れた精液の量は、日々の食事のようでしたわ。そして、この目も殿下のために捧げました。でも、もう殿下はいらない、というのです」

まさにすべてを捧げたということだろう。それなのに捨てられる女の悲劇。

（貴人は情が薄い、というからな）

もちろん、政治的に追い詰められていなければ、オルディーンも彼女を手放そうなどとは考えなかっただろう。

政争に敗れた者に与した末路だ。グエンは同情を禁じえなかった。

「わかった。おぬしの面倒はわしが見よう」

ラルフイント王国に忠義を尽くすグエンは、オルディーンの権力を排さねばならない、という思いにいささかも変わりはなかった。

しかし、相手が全面降伏する、と言っているのだ。

ことを荒立てることはない。できるだけ平和裏にオルディーンが存在が無力化されるように尽力しようと心に決めた。

「さあ、今はとにかく服を着なさい」

グエンは自らの軍服の上着を脱ぎ、ゲリュオンの肩にかけてやろうとする。

「まあ、嬉しい。歴戦の勇者のおちゃんぽ、楽しみですわ」

顔を輝かせたゲリュオンは、寝台から降り立ちグエンの胸に飛び込んだ。グエンもまた抱き締めた。

次の瞬間である。

シヤン……ドス！

「案外優しい方だったようで」

「き、貴様……」

素っ裸で痴態を晒しきった女に、グエンは油断しきっていた。

グエンの腰剣を引き抜いたゲリュオンは、それで持ち主の腹部を貫いたのだ。

「あなたに囲われたら、それはそれで女は幸せになれたでしょうね。でも、残念。この身

体は、オルディーン様専用の肉便器ですの」

「オルディーン、……やはり……謀叛」

グエンは口から血を吐きながら、寝台の上で若い娘に囲まれた若い男を睨む。死にゆく男を見ながら、オルディーンは心情を吐露する。

「俺ははじめから王になりたかつたわけではない。兄上の忠実な手足で十分だった。ギャナックに對してだつて恨みはない。しかし、俺が王になる以外に、生きる道がないのなら、立つしかないだろう」

現場のグエンを懐柔したとして、上はオルディーンの存在を許容する気がない。妻子を王都に残している以上、命じられれば、心情的には反対でも、不本意ながら、と実行することは目に見えている。

「騙してごめんなさいね♪　せめてものお詫びに、死ぬほどのエクスタシーをあげる」
魅惑的な低音で囁いたゲリュオンは刃をえぐるとともに、引き抜いた。

ドバッ！

盛大に血飛沫が上がり、充実した裸体を染め上げる。

「キヤ——ッ!!!」

政治などには興味の間違った若い女たちも、これには驚いて悲鳴を上げる。その女体の森から身を起こしたオルディーンは、寝台から素足を下ろすと、ゆつくりと

歩を進め、そして、寢室の扉を開く。
「さてと、オルフェ、待たせたな。……休暇は終わりだ」

「だったら、だったら、義兄さんが、わたしを妊娠させてしまえば、万事解決です！」

そう叫んだオルフェは、勢いよく立ち上がると振り返り、タオルを取って両手を広げた。「義兄さんの子種以外、いりません。わたし、義兄さんの子種が欲しいんです！ わたしにとつての最高のご褒美は、義兄さんに抱いてもらうことです！」

後ろで屈み込んでいたオルディーンの鼻先には、頭髮と同じ空色の陰毛がきた。仰ぎ見ると、決して大きいとは言えないが形のいい乳房の向こうに、黒縁のやぼったい眼鏡から覚悟を決めた瞳を覗かせる女の赤い顔がある。

思わず額を押さえたオルディーンは、ゆつくりと立ち上がる。

「実のところ、お前の気持ちはわかつてはいたんだがな……。それに応えようとしなかったのは、俺は、大事なお前の婿が、俺みたいな男というのは絶対に反対だからだ。正直、お前がもし俺みたいな男を恋人として連れてきたら、そいつを暗殺してでも反対するね。しかし、お前がそこまで思い詰めているなら、仕方ないかなあ」

「それじゃ義兄さん……」

顔を輝かせる義妹を前に、オルディーンは諦めたように一つ溜息をついてから頷いた。

「ああ、可愛い義妹は、俺が美味しく頂くとしよう」

そう嘯いたオルディーンは、オルフェの顎を取ると、その唇を奪った。

目を見開いたオルフェは、すぐに事態を察して歓喜すると、嬉々として細い両腕でオル

ディーンの首に抱きつく。

当然、オルフェの乳房はオルディーンの胸板に押しつけられ、同時に男の下半身の昂りが、女の下腹部を押す。

「う、うむ、うむ……ふむ」

二人の唇が自然と開き、互いの舌を出して絡みあわせる。

唾液が溢れて互いの顎を濡らす。

そんな濃厚な接吻を心行くまでした後でオルディーンから、唇を離れた。

「あ、あの……義兄さん……」

チラリと下を見たオルフェは、すぐに顔を上げて、湯気に曇った眼鏡越しに上目遣いに見上げている。

期待と不安の入り混じった表情をしている義妹の耳元でオルディーンは甘く囁く。

「今回頑張ったご褒美に、オルフェには最高の快楽を教えてあげよう」

オルフェの向きを反対にしたオルディーンは、その背後から抱き締める。

「あ」

オルディーンは両手を腋の下から入れて、両の乳房を捕らえた。

スレンダーな体躯に相応しい、あっさりした膨らみだ。

ツキヨミよりはあるが、男の手の中にすっぽりと収まってしまふ程度の大きさだ。

この姿勢だと当然、男の昂りが女の生尻に当たる。

尻の谷間に嵌まったものの存在を、十分に意識したのだろう。オルフェは熱い湿った吐息を吐く。

「ああ、義兄さんの手がわたしの胸を……触っている♪ ああ、こんなに揉みしだかれるだなんて……ああ♪」

オルディーンは尻の谷間でグリグリと逸物を遊ばせながら、両手であっさりとした乳房を全体的に揉みしだく。

そうしているうちに、不意に逸物が、女の股の間を抜けた。

オルフェの細い太腿の間に逸物が嵌まる。

「ああ……義兄さん、義兄さんって、やっぱり……スケベ」

「スケベな義兄が好きで、スケベなことをされたかつたんだろ。俺の可愛い義妹は？」

押掬やゆしながらオルディーンは、突起した葡萄酒の乳首を、親指と中指の腹で抓んで引く張った。

「ああ、はい。義兄さんにスケベなこと、されたかったです」

赤面しながらもオルフェは、認めた。

実際、股の間に入った逸物の上からは、ダラダラと止め処なく熱い液体が浴びせられている。

「なら、思いつきりスケベなことをしてやるからな」

莞爾^{かんじ}と笑ったオルディーンは、素股をさせた状態で、執拗に両の乳首を弄ぶ。

女の乳首は勃起してからが本当に敏感なのだ、と知っている男ならではの責めである。クリクリクリ。

親指と中指で抓まれた上に、先端を人差し指で捏ね回される執拗な乳首責めに晒された、生真面目な乙女の頬が紅潮する。

「あ、そんな、そこばっかり……ああッ」

男の指に弄ばれた葡萄酒色の乳首が今にも弾けんばかりにピンピンにシコリ立ち、それをさらに弄り回されたオルフェは身悶える。

しかし、逃げることはできない。

「ひいあ、もう、もうダメえ、ひいああああ!!!」

ビク、ビクビクビクビク……。

背後から抱き締められたまま、瘦身をくねらせたオルフェは、もはや立っていられずに、その場に崩れ落ちた。

そして、がつくりと脱力する身体を背後から抱き締めたオルディーンは、荒い吐息を繰り返す義妹の左の耳元で囁く。

「もうイったのかい。乳首だけでイってしまうなんて、俺の可愛い義妹は淫乱だな」

「だって、義兄さんが……」

湯船の縁に両手をつけて、膝立ちになったオルフェは、白い小尻を突き出した姿勢である。

「オルフェは俺の義妹だからね。淫乱で当然なんだよ」

嘯いたオルディーンは、桃色に紅潮しているうなじに接吻し、細い背筋を舐め下ろしていき、尾骨にまで達した。

それから尻朶を割って、赤紫色の肛門と、頭髮と同じ空色の陰毛が茂る陰部を丸晒しにする。

神経質そうな顔立ちとは裏腹に、なかなかワイルドな茂みである。生涯、男に身を任せるつもりがなかった女である。手入れとかをまったくしていないのだろう。

その豊かな陰毛をくしけずって、その触り心地を楽しんだ。

「ああん♪」

濡れた筆のようになってしまった陰毛の先端から熱い雫をしたたらせながら、オルフェは焦れたように身悶える。

「それじゃ、オルフェのオマ○コの中身を見せてもらおうか」

いやらしく舌舐めずりをしたオルディーンは、両手で尻朶を割りながら、左右の親指で、肉割れを開いた。

「ああ……」

女の秘部を、敬愛する義兄の目に晒されてオルフェは、官能の吐息を漏らしながら、小さな尻をくねらせる。

あらわとなったサーモンピンクの媚肉を、覗き込みながらオルディーンが笑う。

「綺麗なオマ○コだ。これが欲しい男はたくさんいるだろうに、ついに兄離れのできない困った妹だ」

上から、肛門、会陰。そして、開いた肉門。中身はドロドロしていたが、ぼっかり開いた窟穴。尿道口は見えないが、淫核は大きい。

包皮から勝手に剥けた、大粒の赤い淫核だ。

オルディーンの言い分がいささかカチンときたらしく、オルフェは口元を尖らせて反論する。

「だって義兄さんは、わたしがいないと何もできないですもの……」

「くっくっくっ、言うようになったな」

オルディーンは苦笑しながらも、認めた。

「たしかにお前に去られると困る。お前はわたしの半身だ」

「はい。この身は義兄さんのものです。義兄さんに捧げたくんです。だから、もう二度と嫁に行けとか、言わないでください」

オルフェの必死な訴えに、オルディーンは肩を竦めた。

「お前の人生だ。好きに生きるといい、俺はいつでもオルフェの味方だからな」

「はい。わたしも常に義兄さんの味方です。たとえ義兄さんが何をしたらって、わたしはついていきます」

オルディーンとは一蓮托生。戦に敗れたら、あの世まで供をするし、もし暴君となっても、それを止めずに支える。

そういつたいささか偏執的な忠義を感じて、オルディーンはぼやく。

「俺はお前に、自由に好きなことをやってもらいたい、と思っただけなんだがなあ」

「はい。好きなことをさせていただけます。義兄さんの役に立つということが、わたしの喜びなのです」

処置なし、と言いたげに肩を竦めたオルディーンは、そのまま義妹の小尻の中に顔を埋めた。

この姿勢では、男の鼻が女の肛門に嵌まってしまふ。

風呂に入ったばかりであるし、特に匂いはしなかったが、女の身からするととんでもない羞恥なのだろう。今にも泣きそうだ。

ピチャリ、ピチャリ、ピチャリ……。

「あ、くう、くう、き、汚い。そんなところを義兄さんに舐めさせるだなんて、わたし

……でも、ああ、気持ちいい♪」

風呂の縁にしがみつき、細い背筋をのけぞらしながら、オルフェは歓喜の悲鳴を上げる。瞳穴からは、トッピートッピーと濃密な牝汁が溢れ出た。

その快感に真面目な娘は啜り泣く。

「ああ、義兄さんに、舐められている。わたしの汚いオマ○コを舐められている。これは夢、夢なんじゃないかしら？ 義兄さんに舐められるなんて、わたしなんてイヤらしい夢を、でも、夢なら楽しまないと、義兄さんに舐めてもらえるなんて、現実ではあり得ないもの。ああ、義兄さん、いっぱい舐めてください。ああ、特にクリトリスを、クリトリスをお願います。わたし、そこ弱いんです。クリトリス、好きなんです」

自分独りの世界で、なにやら変な現実逃避の妄想に浸ったオルフェは、嬉々として自分の性的弱点を、告白しだした。

それを受けて、オルディーンは、淫核を舌で舐め回すだけではなく、右手の人差し指と親指で抓んだ。

「あ、そこを引っ張っちゃ、らめえええええ!!!」

自分で告白した通り、淫核が本当に弱かったらしい。

剥き出しになっていた大粒の陰核を抓まれて、グリグリと揉み潰されたオルフェは、小尻を突き出したまま、激しく上体を弓なりにさせた。

プルプルプル……。

細い身体を激しく痙攣させたオルフェは、そのままがつくりと脱力する。

「はあ……、はあ……、はあ……」

風呂の縁に両手をつけて、がつくりと脱力する義妹の尻を抱えながら、オルディーンは宣言した。

「それじゃ、入れるぞ」

「え、あ……はい。義兄さん。お願いします」

ヒクヒクと物欲しげに痙攣している膣穴に、いきり立つ逸物の先端が触れる。

（オルフェとやるのか……）

オルディーンの胸中に、なんとも言えない万感の思いが湧き上がる。

大事な大事な妹。血の繋がってない関係ではあるが、下手に血の繋がった本当の兄妹よりも、その絆は強固だった。

慕われていることは昔から承知していた。

しかし、彼女だけは手を出すまい、と自らに固く誓っていたところがある。

（オルフェが妹という立場だけでは満足しない、というのだから、仕方ないよな）

オルディーンは、親しい家族であるオルフェの願いならなんでも叶えてやりたい、と思っていた。

たとえ恋人がいようが、妻子がいようが、オルフェがその男がいい、と言ったなら、オルディーンはその権力を使って、有無を言わさず略奪婚をさせてやるくらい造作もない。それなのにどうしても義兄がいいという、困った義妹の白く小さな尻を持ち、ゆつくりと逸物を進める。

「ああ……」

オルディーンの眼下で、ヒクヒクと肛門が痙攣し、その下で亀頭部が飲み込まれたようだ。

先端に硬いものを感じる。

(これがオルフェの処女膜だな)

それと確認したところで、一気に腰を進める。

「ひい」

念願の義兄から貫かれる歓びを感じていても、痛いものは痛いのだろう。オルフェは前のめりになり逃げようとした。

しかし、そこには風呂の縁があり、思うように動けない。

ブッ!

抜けた。そんなたしかかな感触が伝わってきて、後は道なりにズブズブズブと逸物は沈んでいった。

「はああああああ!!!」

オルフェは大口を開けて、涎を噴き、目からは涙を流して暴れようとする。それを背後から押さえつけながら、オルディーンは強引に進んだ。

ギーギーにきつい腔洞だった。

まさに破瓜中の女ならではの犯し心地だ。しかし、下手な情けをかけても意味はない。オルディーンは容赦なく最深部まで貫く。

先端にコリコリとした子宮口のある存在を感じながら、オルフェが落ち着くのを待つ。

「はあ……はあ……はあ……」

一時の肉棒を握り潰すようなきつい締めつけが収まったところで、オルディーンは愛しい義妹の耳元で囁く。

「オルフェ、俺はお前に幸せな結婚をして欲しかった。しかし、お前が恋人を連れてきたら、その男を八つ裂きにしていたかもな。このオマ○コが、おっぱいが、尻が、身体が、髪の毛一本に至るまで、他の男に愛でられている姿など許せん」

「ああ、義兄さんったら、我儘。でも、ご心配なく、この身体は、オルフェは義兄さんだけのものです」

「では、俺のものだ、という証を刻み込んでやろう」

オルディーンは女に不自由しない身分の男である。その気になればどんな女として思いの

はまだ。

しかし、たった一人の可愛い義妹を犯していると思うと、その昂りはかつてないほどのものだった。

あつという間に、二つの睾丸から溢れ出した昂りが先端まで詰まってしまい、それを我慢するのが大変だ。

「オルフェ、中に、出すぞ」

「はい。中にください。義兄さんの子供なら、わたし産みたいです」

「よく言った」

オルディーンは一気にスパートに入る。

パンパンパンパン！

男の腰と女の尻が激しく拍手音を上げる。

「あつ、あつ、あつ……」

破瓜中とはいえ、二十代も半ばにさしかかった女である。身体は男を迎え入れる器として完全に出来上がっていたのだろう。順応するのも早い。

苦悶の声の中に牝声が混じっている。

それと察したオルディーンは、牡としての欲望を暴走させた。

「くっ、いくぞおおお」

かつてない昂りに支配されたオルディーンは、野獣の如き雄叫びを上げると、義妹の体内で、欲望を爆発させた。

どっぶん、どっぶん、どっぶん。

「ああ、入ってくる。義兄さんの子種が、入ってくるううう」

さすがに破瓜の最中に絶頂することは不可能であったが、愛しい男の精液を注ぎ込まれる歓びに、オルフェは恍惚とした。

心行くまで射精したところで、オルディーンは縮まった逸物を引き抜く。

逸物と陰唇の間に白い橋がかかり、次いで膣穴から、大量の白とピンクの液体が滝のように流れ落ちた。

「ああ、わたし、義兄さんにやられた。やられたんだ」

自分の膣穴から溢れ出す、義兄の残滓を見守り、オルフェは恍惚としていた。

※

「遅い処女消失、おめでどう」

風呂から上がったオルフェを、腕組みをした片目の女が出迎えた。

「いや、これは、その……」

動揺してあたふたするオルフェの姿に、ゲリュオンは苦笑する。

「兄妹といっても、義理だ、ということとは誰でも知っていることだ。祝福こそすれ、責め



るやつなんていないよ」

「そ、そうでしょうか？」

オルフェは眼鏡を下ろし、顔を隠しながら自信なさげに応じる。

「まあ、なにせよお嬢のオマ○コにカビが生える前でよかった。若は本当にお嬢を、妹として生涯扱うつもりなのかと、ヒヤヒヤしていたよ」

「もう、意地悪ですね」

心外だ、と頬を膨らませるオルフェに、いつの間にか顔を出したツキヨミが妖しく笑う。

「うふふ、オルフェさんは、ようやくわたくしたちと同じ土俵に立ちましたわね。これからオルディーン様の寵愛を競いましょう」

ツキヨミの言い分に、オルフェは瞬きをし、言われたことを理解すると慌てて否定する。「わたしは別に寵愛を競うつもりはありませんよ。わたしは義妹ですから。あなたたちとは違うんです」

「あ、ずる〜い」

ツキヨミは頬を膨らませる。ゲリュオンは苦笑した。

「まあ、ようやくスタートラインに立ったというのは同意だな。戦もまだまだ、ここからが佳境だ」

耳元でリフィルの擲擻する声を囁かれながらも、オルディーンはなおも頑張ろうとしたが、ダメだった。

「ジュル、ジュルジュルジュル……」

オルフェに音高く吸い上げられながらオルディーンは絶叫した。

「くく、うおおおおああああ!!!」

ドクン、ドクン、ドクン!

オルフェの口内で逸物が爆ぜる。

「っ!」

眼鏡の奥で、オルフェは目を白黒させている。

やがて小さくなった逸物が口唇から抜け落ち、オルフェは慌てて唇を閉じる。

そして、口内いっぱい溜まったものをどうしていいかわからない、といった表情で硬直している。

「うふふ、オルフェさんったら、それは女が飲むものですわよ」

オルフェの下から顔を出したツキヨミは、オルフェの顔を両手で挟むと、有無を言わさず、唇を奪った。

「うっ!?! うぐ——っ!?!」

もちろん、オルフェにとつて同性に唇を奪われたのは初めての体験だろう。戸惑ってい

るうちに、ツキヨミはチューと吸い上げた。

「こらこら、独り占めはよくないな」

王座の右肘かけから降りたゲリュオンが、ツキヨミの唇を奪う。そして、吸い上げる。

「まったく、こんな淫乱女を侍らせて、あんた大丈夫なの？」

呆れた顔を上げながらも、リフィルもまた左の肘かけより降りて、ゲリュオンと唇を重ねた。

「うぐ、うむむ……」

二十代と三十代の美女は、互いの口腔に入った液体を奪いあうような接吻を繰り返す。

「もう、お姉様たちだけずるいですわ」

ツキヨミは割って入るうにも、二人とは身長が違うので無理だった。

オルフェの方はいまだに茫然としている。

やがて満足したらしいゲリュオンとリフィルは、意味ありげに視線を交わしながら、接吻を終えた。

その間に、オルディーンもなんとか人心地ついた。

「今度は俺の番だな。思いつきりぶち込んでやるから、お前ら自分でパンツを脱ぎな」

王座に座った男の命令に、女たちは素直に従った。

広々とした大広間。王座に座ったオルディーンを前に、左からオルフェ、ゲリュオン、

リフィル、ツキヨミが並んで立つ。

そして、オルフェはミニスカートの中、ゲリュオンは巻きスカートの中、リフィルは前垂れの中に手を入れて、ショーツを引き下ろす。

股布と股間の間に、ツーツと糸を引く。

「……」

濡れているショーツを恋人、さらには同性の前で脱ぐというのは、いかにすれっからしの女たちといえども、羞恥を感じるものらしい。みんな赤面している。

ちなみにツキヨミは脱がない。着物の愛用者である彼女は、下着を穿かないのが普通なのだ。しかし、そのツキヨミもこれから始まることを予感して、膝をモジモジさせながら、顔を紅潮させている。

その光景に満足したオルディーンはさらに命じた。

「その場で仰向けになって、足を思いつきり広げな」

「もう、義兄さんったら……悪ノリして……」

オルフェは不満そうだが、他の女たちが素直に従っているのに、自分だけ反発するのも大人げないと感じたのか、しぶしぶ従う。

王座に座ったオルディーンの見下ろす先では、十代、二十代前半、二十代後半、三十代の美女美少女が、豪快にV字開脚をしてみせていた。

シヨーツがないのだから、いずれも陰部を丸晒しである。

黒、水、赤、金と色とりどりの陰毛が彩りを添える陰唇は、いずれもトロットロの液体を垂れ流している。

ゲリュオン、リフィル、ツキヨミは心得たもので、陰部をオルディーンに見せつけながら、オナニーを始めた。

「オルディーン様、早くください」

「わたしももう、我慢できない」

「あたしたちは若の肉奴隷です」

ツキヨミ、リフィル、ゲリュオンのおねだりに、オルフェは驚いたようだ。

しかし、負けてはいられない、と思ったのだろう。大声で叫ぶ。

「わたしだって、義兄さんのおちんちん欲しいです！」

それを受けてオルディーンは、王座から悠然と立ち上がる。先ほど射精したばかりの逸物は、いまや臍に届かんばかりに悠然とそそり立っていた。

「それでは、祝いの夜を楽しむとするか」

オルディーンは四人の牝獣のいる下段に飛び降りると、いきり立つ逸物を持って突撃した。

まずは、リフィルの膣穴にぶち込む。

「あん♪」

オルディーンとリフィルは同じ年。そのせいで性器の形がちょうどいいのか、お互いぴつたりと嵌まる。

鬘が豊富で、華やかな美貌に相應しい、華やかな腔洞である。

たちまちのうちに搾り取られても、なんら不思議ではない名器の中で、ぐっと我慢して抽送運動を繰り返したオルディーンは、やおら引き抜き、ツキヨミの中に移動する。

「はう♪」

ツキヨミの中は狭い。すぐに先端が子宮口に当たってしまったって、まだまだ成長途中であることを実感させる。

しかし、その分、鬘はザラザラで凶悪だ。

射精欲求をぐっと我慢して、引き抜き、今度はゲリュオンの中に入れる。

「うほっ」

大柄な体軀に相應しく、腔洞も大きい。柔らかい媚肉が、隙間なく逸物に密着してきて、これぞ大人の女の犯し心地といった満足感がある。

この腔穴の中ではつついっつい思いつき暴れたくなるのだが、オルディーンはここでも射精を我慢して、引き抜く。今度はオルフェの中に入る。

「ああ、義兄さん♪」

まだ男に慣れていないといった雰囲気オルフェであるが、二十歳を越えた女である。男を迎え入れる器としては完成しており、硬いが調教のしがいを感じさせる。

「ああ、義兄さん、義兄さん、義兄さん」

オルフェは両手をオルディーンの首に回すと、両足も尻に絡めてきた。そして、自ら腰を突き上げてきた。

奥手と思っていた義妹の思わぬ責めに、三人の美女美少女の中で耐えてきた逸物が翻弄される。

「ちよ、ちよと待て、オルフェ、落ち着け。今日はお前だけでなく、他にも女がいるんだぞ」

「ダメえ、我慢できない。義兄さんの精液を、わたしの身体の中に、身体が一番奥に、いっぱい入れてください」

ガツンガツンガツン！

下から突き上げてくる、貪るようなオルフェの腰使いからオルディーンは逃げられない。

（あ、ヤバイ……搾り取られる）

他の彼女たちの手前、暴発は避けたかったが、このままではどうしようもない。

諦めたオルディーンは、自らも腰を振るう。

ズコ、ズコ、ズコ、ズコ……。

長年義理の兄妹として過ごしてきた男女は、我を忘れて性欲を貪る。

「オルフェ、いくぞ」

「はい、義兄さん」

オルディーンは逸物を最深部まで落とし込みながら、果てた。

「ああおとおおおとおおおおおおおお!!!」

「ああああああああああああああああ!!!」

オルディーンとオルフェは快感を完全にシンクロさせた。そのことによって、常の何倍もの快感をもたらす。

二人は我を忘れて抱きあつた。

「はあ、はあ、はあ……」

「オルフェ」

「義兄さん……」

眼鏡のレンズ越しに、二人が見つめあつて余韻に浸っていると、咳払いの音が聞こえた。「ごほん、大いに盛り上がっているところ、悪いんだけど。あなたの女はまだまだ欲求不満なまま、順番を待っているんだけど」

リフィルの声に、ツキヨミも同調する。

「そうです。蟲貞ひいさはよくありません」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美満の方が多いです。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!